

てんしんらんまん 天真爛漫

～出口すみこ二代教主の書～



「書は人を表す」と言います。「温かな字」「柔らかな字」「厳しい線」など、墨跡からその人の性格や人間性などが感じ取れます。

大本の二代教主・出口すみこの書は、多くの「天真爛漫」「天衣無縫」と言われ、見る人の心に感動を与えています。人々が、「ぬくもりを感じる」という、すみこの書とほしかったいどのようなものなのか、ご紹介します。



みろく博士



【大本H】 <http://www.oomoto.or.jp>

※「大本いろは」No. 29参照

亀岡駅下車。南へ徒歩約10分

京都駅からJR嵯峨野線

【ギャラリーおほもと】

すみこの書をはじめ、大本の歴代教主・教主補の作品は、左記の大本本部みろく会館2階「ギャラリーおほもと」で常時展示されています。

(展示内容は年に数回変わります)

また、全国各地で開催されている「出口王仁三郎とその一門の作品展」でも、数多くの書画や陶芸作品などが展示されます。作品展の予定は、大本ホームページなどでご確認ください。

(各地の作品展は不定期です)

より行けば
作品を鑑賞できるの。

魯山人 後日談

すみこの書を一見するなり驚いた魯山人は、後日、すみこを訪ねました。すみこと面会した魯山人は、その人柄にほれ込み、自作の焼き物をすみこに贈ります。

魯山人から作品を贈られたすみこは、魯山人に礼状を書きました。

礼状を受け取った魯山人は、その手紙を額装して居宅に飾り、来訪者たちに自慢したといいます。

この項の最初に紹介しているすみこの「自画像」の作品の中に書かれた歌には、

「きおつよく
ひろくおほきく
こまやかに
あたたかみある
ひとになりたき」とありますが、すみこ自身がまさに、そのような人だったのです。



大本本部

綾部・梅松苑 綾部祭祀センター
〒623-0036
京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター
〒621-8686
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部 東京宣教センター
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>



出口すみこ二代教主の 生い立ち

出口すみこ二代教主は、明治16年(1883)、後に大本の開祖となる母・出口なおの末娘(8人姉妹の五女)として、現在の京都府綾部市に生まれました。

出口家は大変に貧しく、すみこは子供のころから子守りなどの奉公に出たため、小学校に行くことができません、読み書きを習うこともできませんでした。



すみこは開祖の「お筆先」(No.22参照)により「世継ぎ(二代教主)」に示されます。その後すみこは、17歳の時に、開祖と並んで大本教主となる出口王仁三郎(当時・上田喜三郎)と結婚します。

証言「風神雷神」のよう

すみこが、筆を走らせる様子を、書家の稲垣黄鶴氏は次のように証言しています。
「まるで慈母観音のような、優しい母親という雰囲気の方が、揮毫(きごう)される時には、まるで風神雷神のような感じで、線が、まるで刀の先のように強く墨がのっているところもかすれているところも、すべてに力が満ちあふれています」



二代教主・出口すみこ

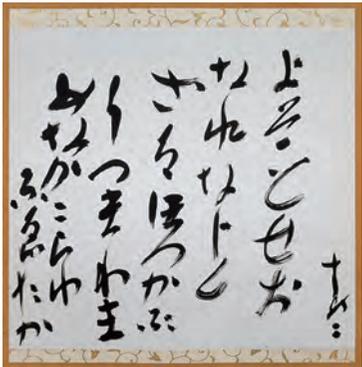


ぼっかぶりの歌

「よそとせお なれなじんだる
ぼっかぶり つまわまめなか
こらわふゑたか」

第二次大本事件(昭和10年に起きた政府による宗教弾圧・裁判により無罪終結)の際、独房に留置されたすみこの元へやってくる2匹のぼっかぶり(ゴキブリ)を思い出して詠んだ歌です。

すみこがぼっかぶりに優しく声を掛け、食事を与えると、ぼっかぶりは毎日やって来たといいます。まるで、人と同じように語り合うその姿から、すみこの温かな人柄をしのぶことができます。



もっと知りたい!

●すみこの生い立ちやぼっかぶりのエピソードなどが記された著作から、すみこの人柄を詳しく知ることができます。

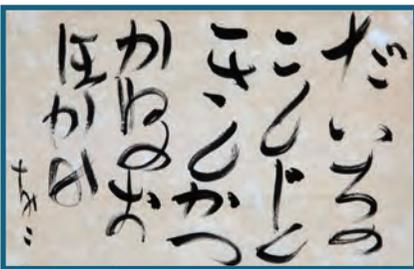
『おさながたり』(1,512円)
『ぼっかぶりのうた』(1,338円)

=お求めは=
天声社売店 Tel 0771-24-7523
京都府亀岡市天恩郷 大本本部 みろく会館1F

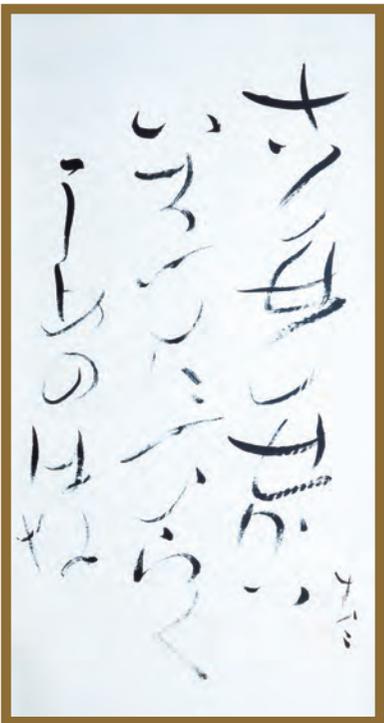


「姫だるま」・「あけがらす」

文字の他に、すみこは墨絵も描きました。すみこが好んで描いたのは、「姫だるま」「あけがらす」「松」「救いの舟」などで、これらもすべて信仰的なものを意味しています。その絵からは、すみこの大らかな人柄を感じるとともに、迷いのない筆運びからは、力強さ、たくましさ、優しさなどを感じることができます。



だいちの
こんじん
きんかつ
かねのお
ほかみ



さんぜんせかい
いちどにひらく
うめのはな

天地のご恩に感謝

すみこが書く文字は、すべて「ひらがな」です。それは、文字を習うことがなかったすみこが、母・なおの書くお筆先を見て覚えた文字だったのです。

そんなすみこの書く文字は「てんのおん ちのおん：」「ひのごおん みずのおめぐみ つちのおん：」というように、神さまへの感謝の言葉が連なる、信仰的なものでした。



魯山人を驚嘆させた 「天下無類の下手な字」

書、陶芸、篆刻などに才能を発揮した北大路魯山人が、備前焼の陶芸家・金重陶陽(人間国宝)宅に滞在した時、床に掛けられていたすみこの書を見て、

「天衣無縫。まったく驚いた。ああいう天才は、三千年の歴史にもちよつと見当たらない」と驚きました。

そこに掛けられていたのが、左の書でした。

「よがかわり てんかむるいのへたなじおかく でぐちすみこ」
このころ、すみこの書を見た有識者たちが、その芸術性を評価しはじめました。この書はそれを受け、すみこが「不思議な世の中になったものだ」と、素直な思いを書いたものでした。

